双子×恋人 ～許されない恋の始まり～

城宝 凜華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子×恋人 ～許されない恋の始まり～

【Nコード】

N1250J

【作者名】

城宝 凜華

【あらすじ】

双子で生まれてきた、男の悠樹と女の深雪。悠樹も深雪も、双子という壁にはいつも違和感を感じている。双子だから、恋人にはなれないとは分かっているのに、なぜか本能が許さない。双子という壁にゆれる切ない2人の物語。

「悠樹ゆうじゆいいいいいいい！」

女の子は、男の子に飛びつき。ギュツと抱きしめた。

「なんだよ。深雪みゆき。」

「嬉しいのっ！」

深雪は、バツと顔を上げて、ニコツと笑顔を浮かべた後、また、悠樹を抱きしめ、静かに囁いた。

「…本当に、悠樹と同じ高校に行けたんだね…」

悠樹は、深雪の頭を撫でて少し微笑むと、小さく、後ろで騒いでいた女子の固まりが

「あの2人…超似合ってるじゃん…？」

「てゆうかー男の方、超好みかもお〜」

「ダメだよ。恋人いるんだから。抱きついてるじゃん。」

小さな声だけど聞こえる。悠樹は少し顔を赤くした。深雪はそれを見て、女子の固まりを睨み付けた。

女子の固まりは、嫌な顔を浮かべながら、去っていった。深雪はホツとして、悠樹に抱きつこうとすると、悠樹は私の肩を掴み、抱きつかせてくれなかった。悠樹は深雪の頭をまた優しく大きな手で撫でて、

「俺たち、カップルに見えてるみたいだね。抱きつくの止めた方が
良い。」

低い声が、私の真上で聞こえる。悠樹は背が高く、綺麗な茶髪をして、顔立ちも良く、頭も良く。良いとこだらけなのに私はまだ良いのは顔だけ。頭が悪いし、ド天然だし、迷惑かけてばかりなのに悠樹は、どうしても一緒に高校行きたくて必死に勉強教えてくれて、絶対行けないと先生から言われてたところにごうして入れた。もしも、悠樹との間にある壁がなかったら、絶対私は、悠樹とカップルになりたい。でも、その壁は、絶対に乗り越えられない。

絶対に、絶対に…。

「…。悠樹いい…。」

深雪は、泣きながら、また悠樹に抱きつこうとした。悠樹は、また深雪の肩を掴み

「抱きつくなくて。」

と、傍から離れた。

「やっぱり同じクラスじゃないね…。うえええん」

深雪は、高い声で泣き出す。すると、深雪は後ろから、誰かに頭を撫でられた。悠樹とは、また違う手。

「そう泣くなつて。深雪ちゃん。俺と同じクラスじゃん？」

深雪は、バツとその人から離れ、悠樹の腕を掴み、叫んだ。

「触らないで！！」

「いいじゃん。別に。深雪ちゃんのサラサラな髪、俺好きだな」

深雪はジツとその男を睨み付ける。深雪は悠樹以外の男から触られるのは全て嫌がる。深雪はモテるせい、色んな男から、触られる。痴漢にもあった事があるし、ラブホテルに誘われた事もある。

悠樹は、深雪の腕を掴み、自分の腕から、離させた。深雪は、下にうつ向いた。

「アタシ、トイレ行って来る」

暗い感じの様子で走って行ってしまった。

「かわいいよね〜深雪ちゃん。あのツンツンしてるところも好きだな

あ…。」

何が言いたいのかこの男。

「お前、深雪に近寄るな。気持ち悪い」

悠樹はハッキリと男に言った。睨みながら。

「なんだよ〜。それよりさ兄さん。俺のことは誠まこと也やって呼んでくれないや。」

馴れ馴れしい。しかも兄さんって。お前に兄さんと呼ばれる筋合い

はない。俺は、またさらに睨んだ。

誠也は、悠樹の睨みに気づいていないのか、また話始める。

「兄さん！俺さ、深雪ちゃん的事まぢ狙ってんだよね。手伝わてく
んない？」

悠樹の怒りは最頂点まで登った。悠樹は、誠也を殴り倒した。そして、上から、また睨み、そっと呟いた。いつもより低い声で。

「深雪にこれ以上近づいたら俺が許さない。消えうせる！」

悠樹はそう叫んだ。誠也は、そこに、ペタンと座り込んだまま動けなくなった。

悠樹は、すぐにその場を去った。

久しぶりだ。こんなに人に向かって怒ったのは。あの誠也って言う奴は、深雪のストーカーだ。体育祭の写真でも、深雪のだけ大量に買い込んでたし、家の住所を深雪の友達に聞いたりしてた。電話もたまにかけて来てた。深雪は、元々嫌がってたけど。

もしかしたら、たかが妹に、こんな感情を抱くのは異常なのかもしれない。深雪と一緒に寝るときは、なぜか眠れないし、深雪に抱きつかれてきた時は、ゾクツとする。もしかすると、本能が深雪の方に動いているのかもしれない。でも、絶対本能にまかせてはいけない。ヤツちゃいけない。だって、僕達は

双子だから…

2 (前書き)

こんにちわ。この作品を書いているkazuです。文系苦手で、上手く書けていませんが、読んでいただいている方には、感謝します。今回は、少しだけ性的描写が含まれています。本当に少しだけけど…。

「…キモッ…」

深雪はトイレの中でそつと呟いた。さっきの奴、毎回毎回私の頭を撫でてきて気持ち悪い。

溜息をついてから、トイレを出ようと我に戻り、ある事に気づいた。とても綺麗なトイレだ。くだらない事かもしれないけど、こんな綺麗な校舎の高校に入れるなんて思ってもいなかった。今まで、頭悪いと周りから言われてきた私も、こんな有望高校に入れるなんて。全て、悠樹のおかげ。もしも双子じゃなかったら……。そう考えると胸が締め付けられる。きつと、さっき腕を離そうとしたのは、双子同士でイチャイチャして気持ち悪いつて思われたからかな…。胸が苦しくなってくる。段々周りの声が遠のいてゆく。私は、トイレを出て、気分転換にジュースを買おうと、自動販売機のある方へ向かった。

2年や3年の群がりが廊下にいっぱいいる。私は、あまり目立ってはいけなないと思い、肩を窄め歩いていった。すると、自動販売機が2台並んでいる場所が見えた。私は、やっとこの廊下から抜けられると思い、走っていくと、いきなり前に男が現れぶつかってきた。

「おい。1年。邪魔なんだよ」

そういわれ、私はしまった！と思い、下を向きながら小さな声ですみません、と言い、逃げようとした。すると、腕を掴まれ、思いつきり壁に押された。ドンツという音が廊下に響き廊下にいる人たちの視線が私に向けられた。

「いったあ…。何するんですか!！」

私は思わず大きな声を出してしまった。バツと上を向くと、そこには、金髪で耳ピアスが何個もつけて、十字クロスネックレスをぶ

らさげた、まさしくチャラ男と言える男が私を押さえつけていた。

私は、あまりの派手さにじっと見つめてみると、男が

「俺は、2年の三木流星^{みきりゅうせい}。お前の携番とメルアドを教えてくださいたら、離してやる。」

私は、すかさず、驚きの顔から、怒りの顔へ変えた。

「ふざけないで下さい。何でそんなの教えなきゃいけないんですか。」

私はできるだけ低い声で言った。しかし、流星は、プツと吹き出して、

「気の強い女だな。気に入った。お前の名前は？それぐらいは良いだろ？」

私は、睨みながらも、しょうがなく、

「仲原深雪。」

そう口を尖らせながら言うと、流星は怪しい笑みを浮かべ、いきなり、顔を近づけてきた。

「俺の女にならねえ？」

そう、言われ、私は、怒りも頂点に達し、手を強引に離し、叫んだ。「アンタなんかと死んでも付き合いたくない！！」

そういうと、そこらにいた、女子がいきなり私を皆で睨みつけてきた。すると、ボスっぽい女の人が

「いい度胸じゃない。流星を振るなんて。流星がどれだけモテるか知ってるの！？」

確かに、顔は良い…かも？背も高いし。でも、初めてあった人にOKするほど私は甘くない。

「で、でも、やだ。」

そう呟くと、流星が、口を塞いだ。唇で。私は、いきなりの事に驚き、暴れようとする、体が密着しすぎて、逃げられない。下も、足でふさがれてるし、右も左も、上も背高いから無理！私は必死に逃げようとする、口の中に変なものが入ってくる。

「…んうっ…！！」

これは…。舌…。つてことは、ディープキス!? 休むことなく、彼の舌が私の口の中をグチャグチャにする。

「うっんっつ…」

周りにいる女子たちは、目を塞いでいる。男子たちは、ニヤニヤしながら私たちを嫌な目で見る。

初日から最低!!!

唇が離れたと思うと、今度は、耳を噛んで来た。

「…ひゃっ…」

私は、思わず甘い声を出してしまう。そして、やっと、唇が本当に離れた。

「ファーストキスでしょ? ありがとね」

そう、耳元で囁き、去っていった。私は、顔が真っ赤になり、

「最っつ低!!!」

と叫んだ。そして、すぐに、その場から逃げ出した。そしてまた、トイレに逃げ込む。

「…やだあ…」 呟き、頬に涙が伝う。

私は、無償に悠樹に会いたくなかった。慰めて欲しいよ。

今日は、気持ち悪い奴に頭撫でられるは、流星つて人にファーストキスを奪われ、ディープキスまで。

なんて運の悪い…。咽も渴いたし…。すると、トイレのドアを叩く音が聞こえた。

まさか、またアイツ!? つてかココ女子トイレ…と、返事もせず、考えていると

「ねえ? どうしたの? 泣いてる声聞こえたけど」

女の子の声…。良かったあ…。私はそつとドアを開けると、そこには、セミロングで、可愛い女の子が立っていた。

「はい。どうぞ。レモンティーだけど大丈夫?」

「ありがとお…」

優しいそうな子。同中の女の子もいないから、友達になれるチャンス

かも…。

「で、どうしたの？」

「いや、あの…。」

あんな事、恥ずかしくて言えない…。私は、顔が真っ赤になる。すると、女の子は微笑み、

「大丈夫！ 言うようになったら言つてよ。メルアド教えるからさ」
女の子は、ペンとメモを胸ポケットから取り出し、メルアドを書き始めた。

私は、ただレモンティーを飲んでいると、

「そういえば、名前なんて言うの？」

「えつと・仲原深雪。深雪でいいよ。」

「へえ〜！ 可愛い名前！ 私は、木村杏、きむら あん杏でいいよ」

「そういえばさ、さつき自動販売機にジュース買いに行く時、なんか、女の子が2年か3年の男の人に襲われてるところ見たんだ…。顔は良く見てないんだけどね」

私は、それを聞き、すぐに自分の事だと分かった。すると、また、顔が赤くなる。それに杏は気づいたのか、

「え…、ちよ、もしかして、あの女の子って深雪！？」

私が、隠せまいと思い、そつと頷いた。

「やだあ…！！ 大丈夫！？ 可哀想…」

杏は、私の肩を掴み、大丈夫？ と何回も聞いてきた。私は、何回もそれに答え、頷いた。

「でもねー。あの人の噂しってるよ〜。中学で100人斬りしたつて。」

「100人斬り？」

「うん。何か〜モテモテらしくて、学年の女子ほとんどに告白されたとか。他校の女子にもね。」

「え、でも、彼女いないと思うよ？ あの人の」

「だって、皆振ってるもん」

そうだとすると、私、告白されたのって、結構すごい事？ でも、な

んかすっごく軽そうだった…。

「まあ、いいよ。もうそろそろ、ミーティング始まるでしょ。行くう。」

「え？同じクラス？」

「うん」

そして、私たちは、1年校舎に戻り、教室へ行った。

3 (前書き)

訂正があります。前話で。

流星の学年は、高2と言っていましたが高3です。

ミーティングも終わり、帰ろうと思ひ、かばんをロッカーから取るうと手を伸ばすと、誰かが私の腕を掴んだ。見てからして、男の人の手。この手…は…、

「…悠樹!？」

周りの女子たちが、こそこそと話し始める。私は、悠樹と一緒に廊下へ出た。

「どうしたの…?」

私は、顔を俯いたまま、喋った。なぜか、悠樹の顔が見れない。もしかすると、あのキスの事がバレているかも知れない、という不安が頭の中を埋め尽くす。

「…アホが…」

「え…?なんて?」

「アホつってんだよ!何知らない男にキス奪われてんだよ!!」

やっぱり知られていた。そりゃあそうだ。あんなだけ、人が多い廊下で思いつきり公開キスやって、噂にならないはずがない。私は、下に俯いたまま、

「…ごめんなさい……」

沈黙が続く中、悠樹の力が段々と、強くなってくる。腕から、聞こえる、鼓動は、早かった。

「知ってるよ。アイツの事。俺と流星先輩は友達だ。」

「え…。嘘!そんな事知らなかった…」

「俺の中学んときの部活の先輩。結構仲良かった。」

悠樹とアイツが友達…。そういえば、中学校で見たことがあったかも…。

ずっと、下を俯いたまま、沈黙が続く。未だに、腕は掴まれたまま。痛いほど強い力を込められている。

「悠樹、痛いよ」

「あつ…ごめ…」

悠樹は、そつと手を離れた。

でも、よく考えれば、悠樹とアイツが友達だとしても、私には関係なかった。でも、なぜか胸が締め付けられた。元々、なんで私は悠樹に、キスされた事知られて欲しくなかったの？こんなんじゃ、まるで、私が悠樹に恋してるみたい。双子なのに。私は、悠樹とくつついちゃいけない。

「悠樹には、関係ないでしょ…」

そつと悠樹に向けて呟く。私は、そう言い切った後、悠樹の顔をそつと見てみると、悠樹の顔はまるで、凍りついていた。悲しそうな目。なんでそんな顔をするの？

「そつだよな。俺には関係ない…。関係ないんだ…。」
そう言くと、悠樹は、自分の教室へ戻っていった。

私は、ペタンと、壁にもたれかかる。なぜだろう。悠樹の背中が、お兄ちゃんの背中じゃなくて、男の人の背中に見えてきたのだ。こんな感情を持っている自分が恐ろしく思える。

「辛いよ…」

そつと、呟いた。これはきつと、絶対持つてはいけない感情。

”双子の兄が好き”

私は、昇降口で、ブーツと立っていた。雨が降っている。傘忘れたし…。雨が止むまで待つ…。って言っても夜になってしまう…。私は、仕方がなく、濡れる覚悟で足を踏み出す。すると、私の目の前に大きな影ができた。そして、私の頭は濡れなくなる。私は、即座に後ろを向くと、そこには、アイツがいた。

「傘忘れたんでしょ？相合傘して帰ろ」

「止めて下さい。先輩。濡れても結構ですから…。」
と走り出そうとすると、大きな手で私の腕を捕まえる。

「…っ離して！！」

「あのさ。もつと優しくしてよ。これでも君の事想ってるんだからさ。」

「私は、あなたに好かれても何の特にもならないんです。だから離して」

「ねえねえ。先輩とかあなたとか止めて流星って呼んでくれよ」
しつこい。すぐに話を変えようとする。

「じゃあ、流星先輩。離してください。」

流星先輩は笑顔で、

「いやだ」

あまりにもしつこいので、深雪はしょうがなく一緒に帰ることにした。

「あのですね。流星先輩。手を繋ごうとするの止めて下さい。カップルじゃあるまいし…」

さつきからずっと、私の手を触ってくる。私は、触ってくることに追っ払っている。

「じゃあさ、カップルになる俺、深雪の事だーいすき」

「軽々しく、そんな事言わないで下さい。私は流星先輩の事好きじゃないです。」

「じゃあ、好きにさせる！付き合おうよ」

「しつこいですよ」

私は、呆れながらも、話している。さつきから、手を、繋ごうとしないので、手の事を意識しないと、バシッといきなり掴まれた。

「やった！捕まえたっ」

「や、やだっ！離してー！ー！」

私は、必死に手をバタバタと振らせる。すると、流星先輩はいきな

り、力を入れて

「離さない……」

真剣な目で私を見つめてくる。家の前につき、早くその目から逃れようと、目をそらし、家の方へ走ろうとすると、腕をまた掴まれ、強引に引き寄せられ、口を合わせる。

「…っ！…んっっ」

そして、唇を離した。

「本当に、好きなんだ…。深雪のこと。」

そっと耳元で呟き、私の頭を体に引き寄せる。抱きつかれている。強い力で逃れられない。

そして、なぜか、流星先輩の気持ち在中途半端な気持ちでは無いと感じた。

「でも、今日会ったばかりでしょ！！どうやって、本当に好きになるの？」

「今日、会ったばかりじゃない。俺が中3で、深雪が中1の時…何回も廊下ですれ違った。いつも、可愛い子だと思ってた。深雪が友達と喋ってたときも、こっそり、声を聞いてた。それに、悠樹の妹だって知って、よく悠樹の家の上がらせてもらってた。玄関に飾ってる写真や、深雪が載ってる写真のアルバムを見るために…」

深雪とは、実際、家で会った事ないけど。」

嘘だ…。こんな人が、私の事を本気で…？

こっという告白も良くある事だけど、なぜか、流星先輩の告白だけは、すぐに、振れなかった。運命ってやつ…なの？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1250j/>

双子×恋人 ～許されない恋の始まり～

2010年10月10日02時24分発行